様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月２８日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：21520330
研究課題名（和文）19 世紀フランス小説における男性へのまなざしとジェンダー構造

研究課題名（英文）The masculinities in 19th Century French Novels

研究代表者　高岡　尚子　（TAKAOKA NAOKO）
奈良女子大学・文学部・准教授

研究者番号：30403314

研究成果の概要（和文）：近代社会の草創期にあった１９世紀のフランスにおいて、「男らしさのモデル」がどのように形成され、変化したかを明らかにすると同時に、小説に多く描かれた「理想的モデルから逸脱する男性像」（「アンチヒーロー」、「世紀病の青年たち」、「母親と癒着する青年たち」など）の表象を、シャトーブリアン、コンスタン、ミュッセ、バルザック、スタンダール、モーパッサン、サンド、コレットらの作品を通して分析した。

研究成果の概要（英文）：During the formation of the modern nation, each country has established the ideal image of his people. To highlight the case of 19th century's French "men", we have focused on the transformation of "masculinities" and tried to examine the typical features of the male characters (including "anti-hero", "young man suffering from the moral malady known as le mal du siècle" or "young man having very close relationship with his mother"), by treating the novels of French writers such as Chateaubriand, Constant, Musset, Balzac, Stendhal, Maupassant, Sand, Colette etc..

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学
キーワード：仏文学・文学一般・ジェンダー・男性学

１．研究開始当初の背景

19 世紀は事物が何によって成り立っているか、どうしてそうなったのか、これからどうなっていくのかということを具に眺め、観察し、切り刻み、分類し、整理することに異常なまでの執念を燃やしたが、その態度は、人間のありさまに関してもかわるところがなかった。

小説という文学ジャンルを成立させ、その絶頂期を誇っていた 19 世紀フランスにおいて、書き手＝作家は基本的に男性であった。彼らは、社会のあり様を筆によって描ききろうと試み、人間の本性を暴きだそうと苦心する。中でも、男性作家が執着を示したのは、女性は何でできているのか、どういう女性が美しいのか、といった「女性性」に関する問いかけであった。それに答えるべく、彼らは女性たちの姿態を繰り返し描き、分類し、そ

のことによって女性像を規定していったのである。作品には当然男も女も登場するが、男は常に「主体」として作家と重ねあわされるのに対し、女は「他者」あるいは「客体」の位置から逃れることはない。つまり、ジェンダーの非対称性は作品を書く人間の性の問題であると同時に、描かれている性のそれでもあった。

このことは、「男性に関する研究」についても同様である。本研究の出発地点において、「女性」「女らしさ」「女性性」に関する研究は微細をきわめていたのに対し、「男性」や「男らしさ」「男性性」に関する研究は、非常に稀であった。「男性性」に関する研究が始まったのは、世界的に見て、1990 年代以降のことと考えられ、フランスでも歴史家の立場から書かれた著作がいくつかあるのみで、文学を題材にしたものはごく限られたものしかなかったのである。

２．研究の目的

１．のような背景を踏まえ、本研究は、19 世紀フランスの小説において、男性ジェンダーはどのようなものとして取り扱われ、どのように描かれることになったのかを明らかにするため、具体的な造形例を、当時の男性作家が書いた作品から抽出し、「男性→男性」へのまなざしの特質を検証することを目的と定めた。

小説というジャンルそのものは、女性の人生に強い関心を示し、多くの筆をさいたことは間違いがないが、当時の社会に「男性性」についての規範がなかったわけではない。従って、男性作家がそうしたことを自己の問題として扱っていた形跡があるのか、と問い直すことは意味があるだろうし、その問題をクリアにすることができれば、逆に、女性をどのように形作ろうとしていたかという意図にも迫れると考えたからである。

さらに、女性作家が描いた作品における男性像と比較することにより、ジェンダーの非対称性の容態を明らかにすると共に、それを生み出す磁場のありかを探究することを目指した。性別主体としては女である作家が描いた男性像には、男性作家が描いた女性像と同様の意味合いを認めることができるのか、という問いを発することも可能であると考えたためである。

３．研究の方法

２．の目的を果たすべく、以下の 3 ステップを経て研究を行った。

(1)19 世紀フランスにおける「男性性」の成り立ち、変遷、およびその特徴について、社会学や歴史学の研究成果も取り入れながら、明らかにする。

(2)19 世紀フランス小説に読み取ることのできる「男性性」とはどのようなものか。男性が男性に投げかけていたまなざしは、どのような性質を持っていたと考えられるかについて検証する。

(3)女性作家が描いた男性像に、男性が描いた男性像とは異なる性格を認められるかどうかについて、検討する。

(4)小説作品や当時の雑誌などに付された挿絵などを詳細に検討し、視覚的に表現される「男性性」の特徴について検討する。

これらの問題について検討する際に、ジェンダー批評やクィア批評の手段を積極的に活用した。なかでも、「女性学」の影響を受けて 1990 年代以降に活性化した「男性学」分野の研究成果には特に注目し、文学批評への応用を試みた。また、セジウィックらの研究者によるクィア批評の成果は、さまざまに応用が可能なため、本研究でもその方法論を積極的に取り入れた。

女性作家の作品については、ジョルジュ・サンドが残した厖大な小説作品を上記の観点から再読し、女性のまなざしにさらされた男性像の特質を明らかすることを目指した。なかでも、サンドの描く青年像には、当時のジェンダー規範が課した期待に沿えず、壊れてゆく例が散見されることに注目し、その意味合いを検討した。

４．研究成果

(1)分析対象は、まず、19 世紀フランスの代表的な男性作家として、シャトーブリアン、コンスタン、スタンダール、バルザック、ミュッセ、モーパッサンらを選択し、彼らの作品に描かれた男性像の特徴を検討した。女性作家については、本研究代表者が長年研究に取り組んできたジョルジュ・サンドの作品を多く扱った。また、20 世紀の作家としてコレットの作品についても言及している。

(2)小説作品に描かれる「男らしさ」や「男性性」について検討した結果、フランスの当時の社会状況が、予想以上に大きな影響を与えていることが明らかになった。19 世紀はフランスにとって、近代国家システムの形成期にあたる。政体は、おおざっぱに言っても、大革命→ナポレオン第一帝政→復古王政→七月王政→第二共和政→ナポレオン第二帝政→第三共和制と次々と移行。それと並行して、王侯貴族を頂点とする社会システムが失効し、産業・金融資本家らブルジョワ階層が影響力を持つようになった。このような中で、新しい国家と国民像の策定を主導するジェンダーとされた「男性」は、それぞれの変化

に従い、「男らしさ」「男性性」にも変更を迫られることになった。特に影響が大きかったのは、ナポレオンの失脚による「男らしさ」モデルの変更である。それまでの強い男性像から、ブルジョワ的倫理観に沿うことのできる臨機応変型タイプへの移行には、さまざまの困難があり、結果的に(3)のような考察へとつながった。

(3)小説作品には、社会学や歴史学が指摘するような、当時の社会における「理想の男性性」がそのまま描かれることがほとんどない。むしろ、そうした男性像から脱落したり、逸脱する人物について、作家たちは多くの関心を払い、作品中に出現させたように思われる。

(4)(2)と(3)について具体的に検討した結果を、研究成果報告書（奈良女子大学リポジトリにて公開）にまとめた。目次と概要は以下のとおりである。

第1部　男たちへのまなざし
第 1 章：「男らしさ」について考えるということ（歴史学、社会学、男性学、ジェンダー学などの成果をもとに、19 世紀フランスにおける「男性性」の特徴をまとめた）

第 2 章：小説が生み出した「世紀病」の青年たち（革命期以降、ロマン主義時代に特徴的な男性登場人物である「世紀病」の青年たちについて、シャトーブリアン、コンスタン、ミュッセらの作品を用いて分析した）

第2部　近代国家が求める男性像
第 1 章：「新しい男」への道程―ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』に描かれる男性像をめぐって―（サンドの『アンディヤナ』に登場する３つのタイプの男性像の意味を、歴史的文脈に沿って検討した）

第 2 章：生き残った軍人たち（理想の男性像は、特に、第一帝政の瓦解によって大きな影響を受けた。ナポレオン時代に活躍した男性たちの連帯とその後について、「ホモソーシャル」の概念を用いながら分析している。またその際、バルザックの作品とサンドの作品にみられる「軍人たちのその後」の違いについても言及している）

第3部　「男らしさ」はどこへ向かうか
第 1 章：「不能」の彼　（「理想の男性像」に真っ向から反対する男性像とは何か、について、サンドの『アンドレ』などを用いて検証した）

第 2 章：「母」と息子たち（ブルジョワ倫理を基盤とした新しい社会において、男性はどのように「男らしさ」を確保していくのか。また、その際、女性ジェンダーとどのように分断、また共生しうるのか、について考察している）

(5)これ以外の論考として、サンドの『愛の妖精』に見られる男性性とその新しさについて、『200 年目のジョルジュ・サンド』（共著・新評論）に、「男らしさのモデル―『愛の妖精』をめぐって」を寄稿している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）
①高岡尚子，「19 世紀前半のフランス小説に見るホモソーシャルなあり方―バルザックとサンドの作品をめぐって―」，奈良女子大学文学部『研究教育年報』，査読無，第 9 号，2011 年 12 月 pp. 57-67.

②高岡尚子，「19 世紀フランス小説に見る母と息子たち―「男らしさ」をめぐって―」，奈良女子大学文学部外国文学研究会『外国文学研究』，査読無，第 30 号，2011 年 12 月，pp. 1-22.

③高岡尚子，「ヒーローになれない男たちの身体―ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』から『ジャンヌ』へ―」，奈良女子大学文学部『研究教育年報』，査読無，第 7 号，2010 年 12 月，pp.49-59.

④高岡尚子，「『男らしさ』はどう描かれているか―ジョルジュ・サンド『アンディヤナ』を題材に」，奈良女子大学文学部外国文学研究会『外国文学研究』，査読無，第 28 号，2009 年 12 月，pp. 39-62.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
①高岡尚子（ほか共著者 11 名），『200 年目のジョルジュ・サンド』，新評論，2012 年，pp.65-78.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
高岡　尚子（TAKAOKA NAOKO）
奈良女子大学・文学部・准教授
研究者番号：30403314

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし